



2018年1月15日発行（季刊）

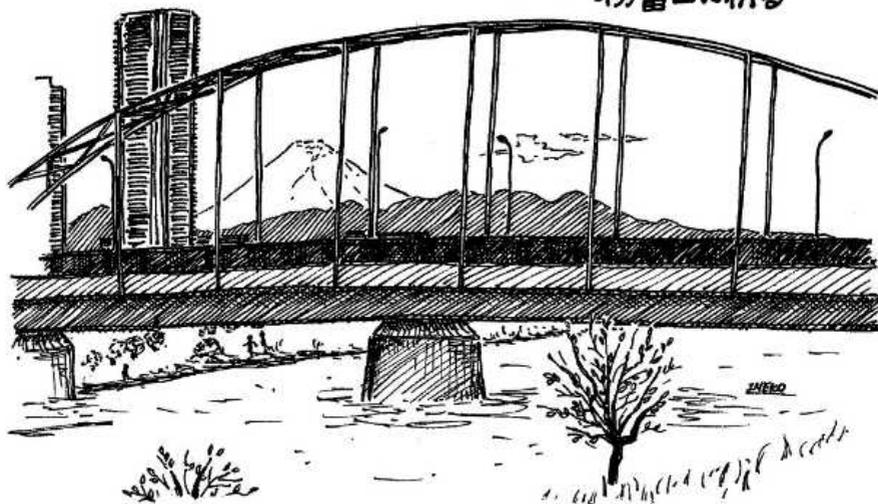


う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2018年1月
第113号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

初富士に祈る



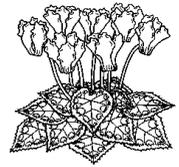
目 次

漢点字の散歩（50）（岡田健嗣）	1
日本の識者が見る第19回党大会（村田忠禧）	8
点字から識字までの距離（106）（山内 薫）	10
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	15
ご報告とご案内	22
漢文のページ	23
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩(五十)

岡田 健嗣

カナ文字は仮名文字(2)



【雄略天皇】

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち
この岡に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね
そらみつ 大和の国は おしなべて 我れこそ居れ
しきなべて 我れこそ居れ 我れこそば 告ら
め 家をも名をも

こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち
このをかに なつますこ いへのらせ なのら
さね そらみつ やまとのくには おしなべて
われこそをれ しきなべて われこそをれ われ
こそば のらめ いへをもなをも

【舒明天皇】

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具

山 登り立ち 国見をすれば 国原は けぶり立
ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ
蜻蛉島 大和の国は

やまとには むらやまあれど とりよろふ あ
めのかぐやま のぼりたち くにみをすれば く
にはらは けぶりたちたつ うなはらは かまめ
たちたつ うましくにぞ あきづしま やまとの
くには

【磐姫皇后(いはのひめのおほきさき)】

八五

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行か
む 待ちにか待たむ

きみがゆき けながくなりぬ やまたづね む
かへかゆかむ まちにかまたむ

八六

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根
しまきて 死なましものを

かくばかり こひつつあらずは たかやまの
いはねしまきて しなましものを

ありつつも 君をば待たむ うち靡く 我が黒
 髪に 霜の置くまでに
 ありつつも きみをばまたむ うちなびく わ
 がくろかみに しものおくまでに

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方
 に 我が恋やまむ

あきのたの ほのうへにきらふ あさがすみ
 いつへのかたに あがこひやまむ

【聖徳太子】

家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる
 この旅人あはれ

いへならば いもがてまかむ くさまくら た
 びにこやせる このたびとあはれ

右は、前号（二二二号）で取り上げました「万葉集」にある御歌です。「万葉集」では、巻、あるいは部立の先頭にその巻、あるいは部立に収録される御歌

の先頭にふさわしい御歌が置かれます。どのような御歌がふさわしいと考えられているかと言えば、巻一の先頭に雄略天皇、二番目に舒明天皇がおられて、わが国の開闢以来の、一つの時代を担われた天皇のお名前がお二人続きます。雄略天皇は、五世紀の後半にわが国を治められた天皇で、記紀では勇壮な天皇として伝えられています。埼玉県の稲荷山古墳の出土品である鉄剣に、「幼武」の文字が刻まれており、辛亥の年（四七一年）の文字が見えます。雄略天皇の力が、現在の埼玉県にまで及んでいたという証左です。舒明天皇は、「万葉集」の時代、天武・持統両天皇とその兄の天智天皇の御父君で、天智皇統・天武皇統の祖に当たられる天皇です。このお二人の御歌を「万葉集」の巻頭に置くことで、この集が何を目指しているかが分かると解されます。

その次の磐姫皇后は、仁徳天皇の皇后です。仁徳天皇は五世紀前半に、わが国を治められた天皇と考えられています。記紀では、神話時代を抜けて、いよいよ大和朝廷が成立しようとする時代を担った天皇と位置づけられます。万葉の時代の朝廷はその直系で、その基礎を築いた天皇です。その後の御歌四首が、巻第一

の「相聞」の冒頭に掲げられています。

最後は聖徳太子です。太子は推古天皇の弟君で、政務を一手に引き受けておられました。仏教に深く帰依し、慈悲深いお方であったと伝えられます。太子の御歌は、巻第三の「挽歌」の冒頭に置かれています。

（太子の御歌の次、四一六番の御歌が、悲劇の皇子・大津皇子の辞世の御歌です。「百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ」 この御歌は、処刑される前に、磐余の池のほとりで詠まれたと伝えられます。）

この御四方の年代を古い順に並べますと、磐姫皇后・雄略天皇・聖徳太子・舒明天皇となります。その間には約二〇〇年です。そしてこの御四方の御歌は、雄略天皇の御歌が最も古いと見られ、天皇ご自身、あるいは万葉時代のような宮廷歌人によって詠われたのではなく、伝統的な歌謡、恐らく宮廷で催される婚儀の席で歌われた、舞踊を伴った祝歌ではなからうかと言われます。当時（現代でも）最も目出度い儀礼と言えば、婚姻とそれに続く世継ぎの誕生です。このような祝歌を集の冒頭に置くのも、また雄略天皇の御製として掲げるのも、『萬葉集』の編者の意図が、舒明・天

武・持統という皇統の祝福にあると解してよいのかも しません。

舒明天皇の御歌も、古い形を残しているように見られます。三番以降に収録されている御歌に比べますと、リズムが少し整っていないように感じられます。これもそれ以降の御歌と異なって、〈文字〉の介在が希薄であることを物語っているのではなからうか、そう思われてなりません。

磐姫皇后と聖徳太子の御歌は、仮託歌であると言うのが定説のようです。その大きな理由の一つが、磐姫の四首の御歌が、一連のストーリーを成していること、また一首一首の御歌も、極めて厳密な短歌形式に従っていることが挙げられます。このような短歌形式は、磐姫の生きた二〇〇年前の時代に遡ることはできないということ、以降の収録歌に、類縁の表現が多く見られるということも、仮託歌であることを証していると言われます。

同様に聖徳太子の御歌も、太子の時代には、まだ短歌形式は成立していないこと、太子は舒明天皇の前の代を治めておられて、舒明天皇の御歌よりも新しい形式の御歌を詠われるということは考え難いということ

が言えます。

このお二方の御歌がお二方に仮託されて、後の世の歌人によって製作されたと仮定すると、万葉の初期を超えてその前の時代に詠まれた御歌は、雄略御製歌とされた一番の御歌と、舒明御製歌とされた二番の御歌だけということになります。そしてそれ以外の、舒明天皇以前の作とされている御歌は、大凡が仮託歌であるということになります。このことは「万葉集」という歌集を性格付ける一つの要素であることは間違いないものと考えられます。このように考えて参りますと、私には「万葉集」の姿が、以下のような像を結んで来るように思われます。それは、ほぼ全ての御歌が、舒明天皇以後に作られたものだとということから、正に舒明天皇をキーマンとして、ちょうど扇の要の位置におられて、そこから二十本の骨（巻第一から二十）が伸び広がつて、四千首余りの御歌が、煌びやかなその世界を繰り広げられているというものです。その一本一本の扇の骨の要に接するところには、その巻、あるいは部立を象徴する人物（多くは万葉以前の、あるいは万葉最初期の）の作とされる御歌が置かれています。それによってその巻、あるいは部立の編

み出す世界の性格が予示されることになります。

このように私なりの「万葉集」の構成をイメージしてみたのですが、むしろ謎は深まります。どういふ謎かと言え、他でもありません。どうしてこのような高度に完成した歌集が、その前段階のものを伺わず、いきなり登場してきたのかということ。勿論残された当時の文献から説き起こされることも多いに違いありません。しかしそれは、極めて微視的なもので、私ども一般にまではなかなか届きません。日本語の表記というところを見ますと、『萬葉集』の歌の部の表記は、構造的には現代文のそれとほとんど変わりません。表記というものはこういうものだとしますと、素人の特権である、できるだけはみ出した想像力を働かせて、表記法の成立や日本語の成り立ちなどを考えて見たい誘惑に、抗し難く感じます。

『萬葉集』の成立は早くとも八世紀の後半と考えられます。しかしその原資料は、「人麻呂歌集」（三種あると推定されています。）など、天智・天武・持統朝の時代に成立していたものが基本に置かれ、その後数十年のうちに作られた宮廷歌人の歌集や饗宴で披露された宮廷人の御歌などが集められて、編者（恐らく

大伴家持を中心とした歌人たち)によって編み上げられたものだと言われます。しかも「記・紀・万葉」と一絡げに言われるように、『萬葉集』は『古事記』・『日本書紀』とともにわが国最古の文献であることは疑われません。そこでこの三書の成立年代を、もう一度確認してみたいと思います。

『古事記』について『広辞苑』には、

【古事記】／ 現存する日本最古の歴史書。三卷。稗田阿礼(ひえだのあれ)が天武天皇の勅で誦習した帝紀および先代の旧辞を、太安万侶(おのおのやすまろ)が元明天皇の勅により撰録して七十二年(和銅五)献上。上巻は天地開闢から鵜草葺不合命(うがやふきあえずのみこと)まで、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を収め、神話・伝説と多数の歌謡とを含みながら、天皇を中心とする日本の統一の由来を物語っている。ふることぶみ。

とあります。つまりこの書物は、神代から初代の神武天皇から推古天皇までの、その統治下の御代について

の伝誦を、稗田阿礼という人物が収集し諳んじたものを、太安麻呂が聴き取って、文章に起こしたものとされます。その文体は「読み下し漢文体」、つまり漢文をわが国の言葉として読んだ形の文体に準じた文体を採用しています。稗田阿礼の集めた旧辞は口伝されたものです。それを文字に一つ一つ置いて文章にまとめたのが『古事記』だということが出来ます。それまでの日本語の音声として発せられていた言葉が、初めて文字(漢字)に写し取られたものだったのでした。

『日本書紀』は、やはり『広辞苑』では、

【日本書紀】／ 六国史(りつこくし)の一。奈良時代に完成したわが国最古の勅撰の正史。神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録などを修飾の多い漢文で記述した編年体の史書。三〇巻。七二〇年(養老四)舎人(とねり)親王らの撰。日本紀。

とあります。舎人親王が中心に編まれた歴史書で、わが国の正史とされています。この書の成立は七二〇年とされますので、『古事記』の成立から八年後で、漢文で表記されています。当時の宮廷官僚・知識人は、

中国語を日常の日本語と同様に用いるだけの言語力を有していたと推定されます。現代で言う「バイリンガル」だったと推定されます。

『萬葉集』は、『広辞苑』には、

【万葉集】／（万世に伝わるべき集、また万（よろず）の葉すなわち歌の集の意とも） 現存最古の歌集。二〇卷。仁徳天皇皇后の歌といわれるものから淳仁天皇時代の歌（七五九年）まで約三五〇年間の長歌・短歌・旋頭歌（せどうか）・仏足石体歌・連歌合せて約四千五百首、漢文の詩・書翰なども収録。編集は伴家持（おとおものやかもち）の手を経たものと考えられる。東歌（あずまうた）・防人歌（さきもりうた）なども含み、豊かな人間性にもとづき現実に即した感動を率直に表し、調子の高い歌が多い。

とあります。

『萬葉集』はわが国最初の歌集です。が、なぜ歌集なのか、これが最も大きな謎ではないでしょうか。しかもこれまでに述べてきたように、その完成度は極め

て高く、その前段階との中間というものがありません。集の中には、古い歌謡、あるいは古い歌謡を模した歌も見られますが、その数が少ないことばかりでなく、そのような歌を交えての、全体の歌の配置に何らかの意味が読み込まれていると解されて、他の歌と組まれた作品の一部分と位置づけられているように見えます。また初期の歌と後期の歌では、その調子にも表現にもかなりの相違はありますが、完成した、共通した一つの表現形式を持った「和歌」であることを、それぞれに主張しています。

『萬葉集』の歌の表記は様々です。しかし当時使用できる文字は漢字しかありませんでした。歌を読み進めて参りますとその表記には、その漢字をその元来の使用法である漢字（音読、並びに音読の熟語）として用いる方法、漢字を漢字として訓読した方法、漢字音をその文字の意味を離れて日本語の音として用いた仮名として用いた方法、またその訓読の音をその音だけ用いた訓仮名として用いた方法など、あらゆる工夫がなされています。ここで言う「仮名」とは、正しく漢字音の音読か訓読の音だけを仮に用いた文字遣いを言います。こうして後世、漢字の音読の音と訓読の音

を、その音だけ借りて発音を表した文字を、「万葉仮名」と呼ぶようになりました。確かにこれが、現在私たちが便利に使っているかな文字の始まりですが、その使われ方は、現代人の使い方に比べますと、遙かに緻密な、注意深いものがあります。このことが恐らく、『万葉集』の一番の特徴ではなからうか、私にはそう思われてなりません。その『万葉集』は、歌の前後に題詞と左注が置かれることがあります。これらは漢文で記されています。つまり万葉集の基本的な表記、散文の部分は漢文で表されていて、歌だけが、分化のまだ進まない段階の和文の表記で表されているということ、和文の表記が、まず「和歌」から始まったということ、しかも「宮廷歌」から始まったということが、『万葉集』の性格を決定付けているものと考えられます。

先にも述べましたように、『万葉集』の成立年代を「記・紀」と比較しますと、集としての成立は半世紀ほど遅れているように見えますが、初期の歌の製作年代は、『古事記』の成立時期よりも数十年遡ります。であれば、『古事記』の編纂者である太安麻呂は、『万葉集』の初期の作品に、既に触れていた、場合に

よっては同じ宮中に仕える身分として、そのころの宮廷歌人と接点を持っていたとしても不思議はありません。そしてそれまで培われてきた漢字の訓読、さらに漢文の読み下し法と、初期万葉の和歌のリズムと文体を参考に、『古事記』の文体、読み下し漢文体（現代の日本語文の原型）に至ったと考えてもよいと言えます。

しかしなお謎は解けませんし、興味はつきません。日本語の表記が、記紀万葉の時代から徳川幕府末、あるいは明治の初期まで、その文書は公式には漢文体で記されてきたこと、そしてそれと同じ時間を『古事記』や『万葉集』に始まる和文体で記された文学作品が、同じ時間を綿々と繋がってきたこと、このことは恐らく、いきなり誕生したように見える「記・紀・万葉」の出現に至る長い年月、文字を持たなかった我が列島に、〈漢字〉と呼ばれる表意文字が伝えられてから「記・紀・万葉」の出現までの長い年月にその秘密が隠されているに違いありませんし、このことを、誰がどのように考えようとかまわないという不文律から、私も想像を巡らせて見たくなる誘惑に抗し得ません。

(つづく)

左は、横浜国立大学名誉教授・村田忠禧先生が、昨年発表されました論文です。先生は、外交関係について、常に新たな視点をご提供下さっております。

【日本の識者が見る第19回党大会】

第二回く村田忠禧氏

<http://japanese.cri.cn/2021/2017/12/01/>

142s267520.htm

村田忠禧（横浜国立大学名誉教授）

1978年12月の中共11期中全会以来、鄧小平の「貧窮は社会主義ではない」との論断に基づき、中国は経済建設を第一の任務とする四つの現代化、改革开放路線を歩んできた。その過程で中国は社会主義の初級段階である、との認識を明確に提起した。しかしどのように社会主義を建設するかについて、世界史上に既存の処方箋があるわけではない。「摸着石頭過河」のたとえの通り、中国の現実を踏まえ、中国の実情に

合致するものは積極的に取り入れる改革开放を採り、社会主義Ⅱ計画経済、資本主義Ⅱ市場経済という「公式」を打ち破り、社会主義市場経済の建設の道を切り開いていった。

日本を抜いて世界第二の経済大国になりはしたが、解決を要する問題、新たに発生する課題は山積している。共産党員の根本的任務である「為人民服務」という精神を忘れ、自己の利害を第一に考える党員が増えた。末端組織から中央にいたるまで、大衆から遊離した腐敗分子がはびこるようになった。腐敗の蔓延は指導党である共産党への信頼を根底から揺るがすものとも深刻で、緊急に解決を要する問題となった。

このような時期に習近平は総書記に就任した。就任後、彼がもっとも力を入れたのは「トラもハエも叩く」反腐敗の闘争であり、その徹底した戦いは人民大衆から称賛を浴び、党と人民との距離を再び近づけ、党を若返らせ、戦闘性、先進性、指導性を復活させた。

小康社会の全面的実現は目前に迫っている。その次

の目標は、自国民の暮らしをより豊かに、より快適に、より健康的に、より文明的に、より全面的な現代化社会を実現させることである。それと同時に地球規模で発生している課題について「共商・共建・共享」の原則で積極的に関わっていくことが求められている。

今や世界第二の経済大国としての地位を固めた中国は国際社会の舞台においても責任ある大国としての役割を果たしつつある。「韜光養晦」から「大有作為」への転換である。中国自身の総合国力の向上に伴い、「一帯一路」構想や「A I I B」（アジアインフラ投資銀行）の設立などの提起を通して、中国自身の発展を周辺諸国、とりわけ発展途上国のインフラ整備事業の共同実施により、地球規模での新たな「共に豊かになる」道を切り開こうとしている。そこで提起された基本理念は「人類運命共同体」である。

時代の変化とともに解決すべき課題も変化している。第一の百年（小康社会の全面的建設の実現）を踏まえ、もう一つの百年である21世紀半ばまでに社会主義

の現代化を実現するという目標の提起はきわめて時宜に即したものと言える。

習近平報告では第二の百年を2020年から2035年までの15年間と2035年から2050年までの15年間に分けた。2035年までにGDPで米国を抜いて世界第一位になることは決して難しい課題ではない。人口が米国のおよそ4倍なので、一人当たりGDPが米国の4分の1であつても米国を抜く計算だからである。

しかしGDPだけが現代化実現の尺度ではない。物質的豊かさの追求だけが総てではない。全面的小康社会の建設が実現したあとの人々の要求は実に多様になる。人々の日々の生活にたいする充実感、幸福感、安心感、連帯感、社会や環境保護などへの貢献意識など、さまざまな角度から現代化を考える必要がある。また価値観の多様性を認め合うことも必要で、そのためには各人の思想信条、文化と伝統を尊重し、憲法その他の法律に反しない前提で、言論・出版の自由が認められ、学問研究では百家争鳴が保証される必要がある。

る。

日本では「2035年までに国防と軍隊の現代化を基本的に実現し、今世紀中葉までに人民の軍隊を世界一流の軍隊に全面的に建設する」といった記述から、中国の軍事力増強に懸念を表明する論調がかなり見受けられる。しかし「報告」で軍隊・国防を論じている分量は全体の4・3%に過ぎない。「強国」という表現は「軍隊・国防」にだけでなく、「人才」「科学技術」「質」「宇宙」「ネットワーク」「交通」「貿易」「文化」「体育」「教育」など様々な分野で用いられている。「站起来（立ち上がる）」、「富起来（豊かになる）」の次の段階として「強起来（強くなる）」という表現を用いているのである。

貧困からの脱却のための社会主義の段階は越え、これからはすべての人々が全面的に豊かになる社会を実現することを目指す。それは中国の夢の実現であるとともに、世界の希望・期待でもある。

点字から識字までの距離（一〇六）

野馬追文庫（南相馬への支援）（二四）

Nさんからの手紙

山内 薫

今回は、毎月本をお送りしている通所支援事業所じゆにあサポート「かのん」所長のNさんに寄稿して頂きました。特定非営利活動法人きぼうが運営している事業所は現在三カ所あり、今年度の受け入れ児童数は、きつずサポート「かのん」未就学児中心事業所で幼稚園保育園に通うお子さんが多く（学童は1年生まで）契約児童34名、じゆにあサポート「かのん」発達障害・知的障害を持つ普通学校の特別支援クラス・通級のお子さんを中心（1年生から中学・高校）で契約児童57名、ちやいんどサポート「かのん」知的・身体障がいをもつ特別支援学校に通うお子さんが中心（小学1年生から中学・高等部）で契約児童34名という状況だそうです。事業形態としては、いずれも児童発達支援・放課後等デイサービス事業所で県の認可を受け運営しています。（本来、障害種別にはこだわって

なかったのですが、学校の下校時間・送迎形態等を考慮すると、こういったすみわけになってしまったそうです。）

震災の思い出とともに

東日本大震災後、南相馬市においては地震津波・原発被害により市民が避難を余儀なくされました。しかし、避難先における環境への適応が難しいお子さんやその対応に追われるご家族にとって、生活の場が変わることは非常に辛いものでありました。

震災から半年。

私たち夫婦は一つの決断をし、戻ってきたお子さんが「安心して通える場所」・「子供たちの心と体をしつかり育む支援」を目的とした児童デイサービス事業所「きつずサポート『かのん』」を立ち上げました。

当時は7名の児童からのスタート。

そんな子供たちに癒され・励まされたのはむしろ私たち大人たち。

当時の発達支援の素敵な思い出を一部ご紹介させていただきます。

【1年生になったばかりのA君】

A君は毎日ドリル片手にやって来ます。ひらがな書き取り練習。

一字一字丁寧に鉛筆を走らせませます。

今日の課題は、「り」「り」「り」

最初はスリムに書かれていた「り」も段々太った「り」に…。

「り」も、こう太つてくると「い」に見えないでもない。

A君に、「これは太って『い』になったね」と話すと、

にこにこしながら、「可哀そうだから痩せて『り』に戻すね…いい？」とのこと。

無事「い」が「り」に戻り、今度は「へ」のつく言葉の「ぬりえ」です。

挿絵は「へちま」

言葉をとくさん覚えたA君は知らない言葉を聞けるようになってきました。

「へちまって何？どんなの？」

「『へい』って何？どんないろ？」と…。

インターネットで「へちま」と「へい」の画像を探し、プリントしたものをA君に渡したところ、さっそ

く茶色のクーピーペンシルを手に取り塗り始めました。

100点満点の「へちま」と「へい」の絵
ぬり終えたときのA君の満足げな顔、素敵でしたよ！

震災から7年。

野馬追文庫様はじめ全国の方々からのたくさん愛情を賜り、当時一年生だったお子さんも近春は立派な中学生に…。

当時一か所からスタートした「きつずサポート『かのん』」も、今では「じゅにあサポート『かのん』」・「ちやいんどサポート『かのん』」と仲間が増え、子どもたちと共に日々奮闘中。

震災は私たちの中ではまだまだ終わることのない出来事。

当手を振り返り、災害で生まれた心身の喪失感に憤りを感じることもありましたが、そういった生活の中で心豊かに過ごして来てくれた子供たちがとても愛おしく、何気ない日常の有難味が今だからひしひしと感じられる今日この頃であります。

特定非営利活動法人きぼう 副理事長

じゅにあサポート「かのん」 所長 N

キッズサポート「かのん」はできた当初、鎌田實の「八ヶ岳山麓日記」（二〇一三年一月一五日（火））に次のように紹介されています。

「キッズサポートかのん」

昨年末、南相馬にできた発達障害や知的障害がある子どもたちの放課後デイサービスに行ってきた。

特定非営利活動法人キッズサポートかのんのである。理事長は市役所の職員だった。

市役所の税務課で、精神的に疲れていたという。

震災後は、避難所の担当を任された。

命がけでやらなければと思ってやってきた。

おおむねひと段落したので、奥さんと2人で自分の夢をはじめた。

51歳で定年退職。

その退職金をかけて障害児の個別指導をする施設をつくった。

自分の家に障害児がいるというわけではない。

「とにかく、人の役に立ちたい」

志が高い。

かのは、高機能発達障害などの子どもたちが、みんなで歌ったり、ゲームをしたりして楽しい時間を過ごしている。

グループではなく、個別に訓練をしながら、社会に出られるように可能性をのばしている。

とてもすばらしい取り組みだ。

実際に子どもたちとおしゃべりしたり、勉強したりする姿を見たが、実におもしろい。

みんな元気でユニークだ。

14歳の男の子は「かのおん新聞」の編集長をしたいた。

大好きなパソコンで、きれいなレイアウトで新聞をつくっていた。

一人ひとりが生き生きしている。

なんだかうれしくなっちゃった。

いま、きずなホルモンとも言われているオキシトシンの勉強をしているが、人間関係をつくるのが苦手な発達障害の子どもにオキシトシンスプレーを使うと、相手の表情を読みとったり、気持ちを推測したりすることができるようになるという報告がある。

そういう科学的なサポートも大切だが、かのはのよ

うに人間と人間とのサポートの両面が大切だ。

発達障害は社会性の障害ともいわれ、子どもたちも、お母さんたちも疲れている。

キッズサポートかのはのような場があることで、どちらも救われているような気がした。

すばらしい施設だ。(http://kamata-minoru.cocolog-nifty.com/blog/2013/01/post-Of13.html)

Nさんからは本をお送りした後、いつもお礼のメールを頂きます。その中のいくつかをご紹介します。

「毎月頂戴している絵本どれもが素敵で、一日をいつも心待ちにさせていた দিয়ে おります。

放射線の件ですが、実際うちの息子夫婦と孫は避難生活の延長を嫁の実家がある神奈川県でしており、盆と正月程度にしか会えずにおります。

震災がなかったら……と思うことも今まで度々ありましたが、正直何が正しいのかはわかりません。なぜなら結果は後になってみないとわからないからです。

一つ言えることは、子育ては親の責任である事です。

放射能の影響は親が不安だと感じるなら、それは親が子供をしっかりと守るべきだと思います。支援者や親が疲弊していると子供にも大きく影響を及ぼします。

かのを立ち上げるにあたって、私たちはこの場所ですっかり地域や子供を守る……そう心に決めました。決して自分たちの価値観を押し付けることなく、只々保護者さんやお子さんに寄り添っていければと思ってきました。

支援者だからと気負わずに対応することも大事かと思うのです。

なーんて厳しいことを言っていました。実際自分たちもかつてそうであったため気持ちはわかりません。

今は出来るだけ楽しい時間を子供たちと共有することにエネルギーを注いでいる所です。

色々愚痴めいたことを書いてしまったことをお詫び申し上げます。 二〇一七年五月

「のまおいぶんこのお礼が遅れてしましまして、大変申し訳ございませんでした。

今回頂戴した、「びよーん」の大型絵本は、かのが始まったばかりの頃、図書館から借りてよく子供たちに読み聞かせをしていたものです。かつて「びよーん」とお話が進むにつれて一生懸命「かえるさんやトビウオさん」になり切っていた子供たちも、今はもう立派な5年生以上になりました。

今回いただいた絵本をまた次の世代へと読み聞かせてまいりたいと思います。

小高の避難解除は、原町に家を求めた若い世代も多く、果たして若い家族がどのぐらい戻るのかはわかりません。

私どものスタッフの家族も相馬や原町に家を建て、遠くに避難している家族も戻らないと決めているとの話を聞き、今回の震災で家族が分裂してしまったケースを多く聞き、改めて震災の悲惨さを最近になって感じるようになってまいりました。

まだまだ東日本大震災の爪痕を残しながらも、熊本地震による新たな被害者が多く生まれたことに胸を痛めている今日この頃ではあります。

元気が取り柄の私。心身ともにすっかり夏を乗り切ってまいりたいと思っております。」二〇一六年六月

「いつも素敵なお本を頂戴し大変ありがとうございます。す。

フクロウが大好きな職員・ペンギンが大好きなお子さん……。

今回の絵本を開くとすぐ子供たちは大喜び。

動物たちの癒し効果はばっちり子供や職員たちにも届いておりました。昨年1年間、当事業所に対しましてあたたかいご支援を賜り感謝申し上げます。

絵本から「かのん」の子供たちが学んだこと……。

表現する力・相手の立場に立ったものの見方・慈しみの心・憐みの心……様々です。

震災から5年目になろうとしています。絵本がかのんの子供たちの心に大きく影響していることは間違いない。子供たちの心の成長が最近になって特に大きく感じられるようになってきました。

きつとうちの子供たちも絵本を通じて感じ学んだことを大きくなってから思い出し、そのまた子供に今後その素晴らしさを伝えていくことを信じておられます。」

二〇一六年三月

「東京漢点字羽化の会」第142～144回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2017年10月の例会（第142回）10月11日（水）

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

『萬葉集釋注』の校正説明のために、横浜から吉田さんがお出でくださった。皆様どうぞ『萬葉集』の校正もよろしくお願いいたします。「東京漢点字羽化の会」で入力していただいている『岩波古語辞典』とともにますます古典の世界に入ってゆける。岡田さんは、フルにどちらも活用している。

木村はフルにはとうてい及ばないが、それでも読ませていただいている。皆様ありがとうございます。

朝日の記事の入力の組み分けをしていただいた。岡田さんから入力の詳細について説明があった。

2017年11月の例会（第143回）11月8日（水）

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

10月9日に岡田さんは「FM戸塚」で収録をし

て、漢点字のことをお話されたと報告してくださいました。これを聞いて興味を持ってくださる方が現れて欲しい。

このオンエアは、10月22日であるが、アーカイブスでも聞くことができるとのことである。

木村はこの放送をデイジーにしていただけだったので、早速その日のうちに聞かせていただいた。

岡田さんの漢点字にたいする熱い思いがひしひしと伝わってきた。とても聞きやすく無駄のないお話であった。漢点字で辞書を読めるように、岡田さんの周りにいらっしゃる方からはじめて、漢点字入力をしてくださるボランティアを募り、漢点字入力の皆様が、辞書を入力し、印刷し、製本という、将に手作りの、漢点字本、90巻を作り上げた話、更に、白川静著『常用字解』を音声で聞けるように、新たに音訳プロジェクトを立ち上げて、音訳を進めていることなど漢点字を学ぶための資料作りについて話された。

朝日「歴史学」入力のグループ分けをした。

11月15日の横浜での印刷はIさんとSさんとMさんが行ってくくださることになった。皆様お願いいたします。

す。

2018年2月の活動予定日を確認した。ただ学習会の方は学習者とも相談することにした。

入力方法の具体的な説明をした。

今日は一人の会員のご紹介でお一人入会してくださいました。どうぞよろしくお願いいたします。

朝日の記事の入力グループ分けをした。

11月15日の横浜での印刷は、三人の方が行ってくくださった。皆様何時もご協力をありがとうございます。

岡田さんが基本的な入力方法についてさらに詳しく説明した。

2017年12月の例会(第144回) 12月13日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

この12月で「東京漢点字羽化の会」の活動は13年目に入った。皆様地道に誠実に活動を続けてくださいます。ありがとうございます。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

何時ものように朝日の記事入力のグループ分けを決

めた。

1月17日の横浜での印刷に行ってくださいる方がお申し出くださった。

ありがとうございます。

今日はパソコン入力について、個人的にそれぞれが疑問に感じていることについて個人個人で教え合った。これも大変有意義なことであった。

今年の3月は菅野良之様が急逝されて、会としてはとても寂しい年になってしまったが、菅野さんの分も含めて皆様滞りなくお仕事をしてくださいましてありがとうございます。

来年も皆様ご健康にご留意くださいまして、末永くよろしく願いいたします。

* 予告

2018年1月の例会(第145回) 1月10日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年1月の学習会(第116回) 1月20日(土)

17:30~19:30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

2018年1月28日(日) 横浜と東京の合同新年

会、場所 桜木町ワシントンホテル5階ドルフィン

2018年2月の例会(第146回) 2月7日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年2月の学習会(第117回) 2月24日(土)

17:30~19:30、ヒューマンプラザ7階第2会議室

2018年3月の例会(第147回) 3月7日(水)

13:30~15:30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年3月の学習会(第118回) 3月24日(土)

17:30~19:30、ヒューマンプラザ7階第2会議室

わたくしごと

わたしには、わたしを含めて、あるグループで知り合った三人の親しい友がいる。

わたしたち女性三人の共通点は視力0という視覚障害である。

ひとり自立した独身、ひとりは結婚し、既に社会人として立派に働いている娘さんを育て上げ、わたしはといえば、結婚はしたものは無く、今はその夫に先立たれたという、それぞれ異なる環境で生きてい

る。

ふと考えてみるとわたしたちのこの関係はもう四、五年にもなっている。わたしのように七十を超えた多くの人の中には、幼友達、あるいは学生時代、その他趣味の世界など、いろいろな関わりの中から生涯にわたって親しく心を通わせ、密度の濃い永い交友関係を持ち続けている人も沢山いると思う。

わたしたち三人の付き合いは長いとはいうものの、三人が一同に会することは昔は少なかった。言うまでもなく三人が時間を合わせるのが難しいことが大きな理由である。

けれども、AさんとBさん、AさんとC、あるいはCとBさん、というように別々に会い、また電話を通して三人は互いの近況を知り、健康など気遣い合ってきた。

Bさんは我が家へよく泊まりに来ては夜通し二人で話していた。

Aさん母子（おやこ）は、泊まりはしなかったけれ

ど、ご主人はお仕事をし、親子だけでよく我が家を訪れてくれた。

子供を好きな夫は、わたしとAさん親子を連れて近所のお店へ行つては、夫の小遣いで買える程度のかわいいワンピースやパンツを買ったり、子供を銭湯にも連れていったりした。今では立派な女性になった彼女の前で、こんなことは言えないけれど、彼女自身も覚えていたことは確かである。

また、Aさん親子三人揃って来たときは、近くの公園や川沿いの散歩道へ5人で行き、途中にあるブランコや滑り台、ロクボクなど、子供が飽きるまで遊ばせながら、わたしとAさんは遊具の側のベンチに座つて、子供のこと、学校のことなど様々に話していた。二人の男性は自分の持ちうる限りの視力を使って、小さな女の子を見守っていた。

こうしてひと遊びしてから我が家へ戻り、Aさんの手作りのおかずと、わたしの作ったものなど、5人はささやかな、けれども真心込めた食卓を囲んだ。

二人の男性の交わすお酒ものんびりと楽しそうで、みんなそれぞれ満足していた。

小さかった娘はやがて大学生となり、自立して遠くの大学へ行った。

Aさん夫妻の決断の立派さにわたしはただ驚嘆していた。

ある年のお正月のこと、娘さんは親元へ帰って来ないというので二組の夫婦でお正月を過ごそう、ということになった。

毎年作る昆布巻きや酢の物、きんぴらや煮豚ではなく、なにか珍しい工夫はないか、とわたしは思案した。

そんなとき、ラジオからおせち料理ひと揃いの宣伝をしきりに聞かされたわたしは、いつになくそれが気になり、いったいなに入っているのか知りたくなかった。

「このおせちのお重一セットがあれば三、四人分はあるので、忙しい主婦も大助かりです」なんて言葉にいつの間にか心がそられた。わたしは特別忙しい主

婦ではないけれど、いったいなにが詰められているか知りたくなったのである。

デパートやスーパーへ行ってみてもなんだか分からない。

わたしは一計を案じた。

そうだ、今年は二組の夫婦だけだから、いつそのことと同じものを二セット買おう。なにが入っているか、宝箱を探すつもりで、夫婦それぞれが一セットを手元に置いて好き勝手に気に入った袋を開けて食べてみよう。

友にもことの次第を打ち明け、「そんなわけで、一切手ぶらできてね。ただこんなやりかたはいやだったら、まだ注文はしていないから、反対なら反対って言うてね」と伝えた。

わたしたち女性は視覚0、それぞれの夫は強度の弱視なので、お重に添えられているお品書きや主な材料、料理法などの解説はまるで読めない。

まずお屠蘇を造るための屠蘇散らしきものが出てき

た。これは作るのには面倒で、いきなり美味しいお酒にしようということになった。

それぞれ風袋を触って、これは蟹だ、かまぼこだ、伊達巻だ、多分これは昆布巻きだろう。このコロコロした感じは小蕪かな？　これは黒豆だ、田作り、銀杏、きんとんらしい。などと四人は袋を点検してから選んで開けて食べては、互いに報告しあつた。

「これはエビだけど頭ばかり大きいなあ」

「この袋は蟹だ。はさみだなあ」

「当たり前、伊達巻きだわ」これを好きになわたしは喜んだ。

でも当然わたしたちにとつてはあまり美味しいと思えないものもある。がっかりしたり笑つたり。

一番になのか分からないものは練り物である。エビの味がするのでまあすり身にエビが入っているのだろう。蟹の味がする練り物もある。

でも料理の名前がわからないことが、だんだんいらいらしてきた。最初は「食べてはいけないものはないからなにを口に入れても大丈夫だよ…」などと笑つ

てもいたが、やはり素材がなになのか分からないのはおもしろくない。しかも練り物が続くとだんだんいらいらが募ってくる。なにを食べているのか本当のところ分からないままにやたらに開けては食べているうちに、おなかも一杯になり、みんなやや不機嫌にもなつてきた。

夫が「いったい誰がこんなときめたんだ？」とAさん夫妻にまともに謝るのも変なのでそんな言い方をした。

「こっちの袋は大きすぎるから開けたら大変だからそのまましておこう」と、この騒ぎを終わらせることにした。とにかくお互いに一セットづつ責任があるからね。なんてわたしにおどされて、Aさんは困つていた。

夫はそうでなくても食が細いので、割り当て分が増えていく。

やれやれまいったまいったである。

多分賢い彼女はこんなつまらない冒険はどうかかな？　と思つていたであろうが、わたしがあんまりおもしろ

がって提案したので止められなかったのかもしれない。それはあとの結果で、わたしが反省したことである。

結婚式場、その他の会食場でお料理を運んで下さる方が

「これは：です」とお料理の名前を言い、ごく簡単に素材と料理法を説明してから配ってくださるからこそ美味しいのだと思う。

この四人の不機嫌の解消法として、夫の提案で「浅草へ行こう、ソバでも食いに行こう」ということになり、夫のおごりでおソバを食べたのだが、もうみんなおなか一杯すぎて、そのおソバさえ何時もとは違ったのはなんとも情けないことであった。

このおおまぬけな大失敗は二度と繰り返してはしませんが、あれから15年経ってもわたしたち5人が集まるときは欠かせない話題のひとつである。

今ではAさん一家が毎年初売りを目指して美味しい

ものをたつぷり買い求め、運び、娘さんのお世話で盛りつけ配膳、品物の説明一切をしてくださっている。我が家にある食器もよく分かっている。わたしは小鉢などを出すのも彼女に任せきっている。

わたしはただ後片付けをすればいいのだ。

この娘さんが子供の頃「おじちゃん、おじちゃん」と言っていたのを、そのままわたしたちみんな「おじちゃんね、おじちゃんね」と彼のことも話し、彼もこの席の仲間にならんと座をしめている。

今年も5人揃ったことを感謝し、来年も八広のこの家が集まりましょうね、と約した。

やがてAさん一家が帰り、一晚泊まってゆくBさんとさらにおしゃべりをしながら後片付けをするわたしは、この仲間のあることを改めてありがたいと思つた。

2018年1月4日（木曜）

「報告と案内」

あけましておめでとうございます。

昨年は漢点字の世界では、創案者である川上泰一先生の奥様・リツエ様のご逝去なさいました。哀悼に堪えません。

今後漢点字をどのように継承して行くか、漢点字使用者である私たちに課せられた責任は、軽くはないと考えております。

より一層のご支援を賜りますよう、どうぞよろしく
お願い申し上げます。

一 本誌『うか』をホームページへ

会員の木下さんのご尽力で、本誌・機関誌『うか』のバックナンバー、第一号から前号・一―二号まで、本会のホームページ (<http://www.ukanokai-web.jp/>) に掲載することができました。木下さん、大変ありがとうございます。

第一号は一九九七年四月に発行しました。その後、当初は隔月刊で発行して参りましたが、現在は、季刊



となつております。

横浜漢点字羽化の会は一九九六年の一月に発足し、活動を開始しました。その一年後から本誌が発行されたこととなります。また東京の羽化の会は、二〇〇五年に発足しました。従つて、本誌をご笑覧いただくことで、本会の活動を跡づけていただくことができま

す。
皆様におかれましては、是非ホームページにアクセスしていただきたくお願い申し上げます。

二 FM戸塚で放送、アーカイヴに

昨年10/23(月)に、コミュニティ放送局・FM戸塚(横浜市戸塚区)のラジオ番組、「シビックプライド・ダイアログ」に、岡田が出演しました。

この番組は、本会が当初からお世話になつております元横浜市議会議員の大滝正雄先生が司会を務められて、女性のアナウンサーの方の進行で、先生からいただくご質問に、岡田が応えるという形で進められるものです。

放送は終了致しましたが、パ(25ページへつづく)

『論語』より

子曰、「朝聞道、夕死可矣」。
(里仁)

子游曰、「事君数と、斯辱矣。朋友数と、斯疏矣」。
(里仁)

子曰、「知之者、不如好之者、好之者、不如乐之者」。
(雍也)

参考図書

『朗読してみた中国古典の名文』
渡辺精一(祥伝社新書)

子曰く、「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」。

子游曰く、「君に事えて数とすれば、斯れ辱めらる。朋友に数とすれば、斯れ疏ぜらる」。

矣 || 強調の記号。訓まない。

数と || 何度も同じことを繰り返かえすこと。ここ
では諫めや忠告めいた言葉をくりかえすこと。
(こは上の字を重ねて訓読みする記号)

子曰く、「これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを樂しむ者に如かず」。



子游像

子游(前506〜?)

中国、春秋時代の学者。
孔門十哲の一人で、文学
(学問)にすぐれる。
魯国の武城の長官となり
善政を行った。



子曰ク、「朝ニ聞カバ道ヲ、

夕ニ死ストモ可ナリ矣」。

子游曰ク、「事ヘテ君ニ数々ス

レバ、斯レ辱メラル矣。朋友ニ数々

スレバ、斯レ疏ゼラル矣」。

子曰ク、「知ル之ヲ者ハ、

不_レ如カ好ム之ヲ者ニ。

好ム之ヲ者ハ、不_レ如カ樂

シム之ヲ者ニ」。

孔門十哲

孔子門下の中でも特に優れた弟子10人をいう。

「徳行には顔回（がんかい）、閔子騫（びんしけん）、
冉伯牛（ぜんはくぎゅう）、仲弓（ちゅうきゅう）。
言語には宰我（さいが）、子貢（しこう）。
政事には冉有（ぜんゆう）、季路（きろ）〔子路に同じ〕。
文学には子游（しゅう）、子夏（しか）。」

『論語』先進篇より

※ 徳行、言語（弁舌）、政事、文学（学問）は
孔門の四科と呼ばれ、四科十哲ともいわれる。

(22ページから) ソコン・スマートフォンで同局のホームページにアクセスしていただきますと、アーカイヴとしてお聴きいただけます。本会のホームページからもアクセスしていただけます。

既にお聴き下さいました皆様からは、本会の活動の歴史がよく分かってよかったというお声をいただいております。

まだの方は、是非お聴き下さい。

三 漢点字協会のその後

昨年は、日本漢点字協会の会長であられました川上リツエ(泰一先生の奥様)のご逝去という、誠に悲しい年となりました。そのような状況の中、漢点字協会の活動は、事実上停止の状態のまま現在に至っております。

本誌前号・前々号と、協会から発信される情報をご報告、あるいはそれを手がかりに今後の見通しの検討などして参りましたが、まだ旧会員(現在は会費を収集しておりませんので、このように呼ばせていただきます。への、協会からの、具体的な説明はございま

せん。

本誌の執筆者の一人の木村多恵子さんは協会の理事でもありますので、現況についてお尋ね致しますと、理事会からの情報では、本誌前号でご報告致しましたのと異なつて、前々号のご報告に立ち戻った感があると懸念されておられます。

木村さんのお話では、理事の間で交わされる通信では、「漢点字の普及はどのようにして行くべきか」とか、「全国の漢点字使用者をどのように糾合すればよいか」といった、組織としての活動や組織の運営に関わる議論がなされているのではなく、「どのようにすれば速やかに協会を収められるか」という内容に終始しているとお話でした。

前号では協会の理事会では、まず協会の所有している漢点字の資料を電子化して、協会をスリム化して、金銭的な費用と人的な負担を軽減しよう、それには電子化が終わった資料は廃棄することから始めて、贅肉を落とそうという計画が進められていると申し上げました。そうであるならば、大変前向きな議論と思われまますし、そろそろそのように進める具体的な施策につ

いての議論が始まってよいのか考えておりました。

ところがこのほど木村さんのお話では、前々号のご報告致しましたように、協会の財産というべき、全国の漢点字訳ボランティアの皆様が製作して下さった漢点字書や漢点字の資料を、この三月を目処に、産業廃棄物として処分しようという案が提出されて、理事の中から反対の意見が出ないままに遂行されようとしているとのことです。資料の電子化を進めながら組織の体力を改善するために、廃棄できるものは廃棄しようという議論であれば大変積極的な議論と言えましようが、協会という組織を収束するために、まずはその妨げになる膨大な資料を廃棄しようとしているように伺える、そのように案じられるのが現状と、ここにこそ報告することになりました。

さて会員として協会に所属して参りました者（岡田）として、この協会の理事並びに評議員とそれぞれ会議は、どのような性格のものか、これまで判然と知る機会を得ませんでした。今回日本相撲協会に関する報道が盛んになされており、「理事会」、「評議委員会」という語がよく聞かれるようになりました。

そこで振り返って、川上先生のご存命のころを思い返しますと、漢点字協会も、法人化を目指していた時期があったことを思い出しました。その定款も、素案を拝読したことがあります。そのような中で、「理事」、「評議員」という役職が設けられて、法人としての組織作りを目指そうとお考えになられていたのかという想像が、頭の中を巡ります。

何れにせよ川上先生の奥様がお亡くなりになられて、その奥様が頼りとも力とも頼んでおられた方々によって、一年も経たぬうちに、その組織の収束が図られることになりそうだというのが、私どもが知り得る現状だということのようです。勿論充分な確信のもとに申し上げることはございませんが、それを否定する情報もございません。

私どもが川上先生のお力で勝ち得たこの〈漢点字〉を、このまま歴史の時間の中に埋もれさせてよいのか、漢点字使用者は、心して考えてみなければいけない時期に差し掛かったと言つてよいように思われま

編集後記

▼「報告・案内」欄に岡田さんがお書きになったように、本機関誌「うか」の創刊号以来の全バックナンバーを当会のホームページに掲載することが出来ました。具体的には機関誌「うか」の該当する号の「PDF」ボタンをクリックすれば、その内容が紙面に印刷されたままの状態が表示されます▼最近のwebブラウザは、パソコン自体の進化と共に高性能となっており、PDFファイルを開覧するのも非常にスムーズに動作し、表示画面の拡大・縮小も自由に出来るので、紙の冊子を読むよりもかえって読みやすいという利点があります。また、ブラウザで直接内容を表示する以外に、ご自分のパソコンにダウンロードしてパソコンの中に『うか』文庫を作って、便利に利用することも出来るわけです▼ただ、20号以前の古いものは紙の原稿をスキャンして、PDFとしていますので、それより新しいものと比べると若干画質が落ちますが、ご了承いただきたいと思います。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。